

熟塾新春公開講座 ～ 緒方洪庵先生

生誕200年記念講座 第一弾 ～

芝哲夫大阪大学名誉教授と巡る

適塾(国指定重要文化財)と

除痘館記念資料室

講師：大阪大学名誉教授 芝哲夫先生

2010年1月16日土曜日

午後 1時30分～4時30分

登録有形文化財 芝川ビル 地下1階 ベトナム料理 レストラン
リヴィゴージュ → 除痘館記念資料室 →
国指定重要文化財 適塾

今からから200年前、備中国(現・岡山県岡山市北区足守)足守藩士・佐伯瀬左衛門惟因の家に、三人目の男の子が生まれました。長じるにつけ生まれつき虚弱で病気がちなことに悩み疑問を感じます。『人は何故、病になるのか・・・』自らの体に少年は問い続けました。やがて、医学の道を志し蘭学を学び、医師として治療にあたる中天然痘予防のため除痘館を開き奔走すると共に、大阪に蘭学塾「適々斎塾(適塾)」を開きます。ドイツの医師フーフェランドの医師の心構えを説いた扶氏医戒之略「金銭や名誉の為ではなくただ人を救え」を医師の心得として出版し広く志を伝えます。全国から緒方洪庵を慕い多くの若者が集い、福澤諭吉、大鳥圭介、橋本左内、大村益次郎、長与専斎、佐野常民、高松凌雲など幕末から明治維新にかけて活躍した多くの人材を輩出しました。やがて緒方洪庵の名声は将軍家にも届き、奥医師兼西洋医学所頭取として江戸に招かれた翌年、労咳のため吐血し54歳の人生を閉じました。明治維新まで、あとわずか5年でした。

医師として最高の地位につき江戸にありながら、自由に市中の人々と交わり、塾生たちと過ごした日々を懐かしんだという適塾での日々とは…、往時の姿を今に伝える適塾でどのようなドラマが展開したのかを緒方庵先生生誕200年目の新春に、長年「適塾」顕彰活動が続けられ著書「適塾の謎」を綴られた芝哲夫大阪大学名誉教授(85歳)と共にその門を潜り、除痘館記念資料室を見学しました。

芝川ビル(国登録有形文化財)：

大阪市中央区伏見町3-3-3

昭和2年に竣工された芝川ビルは、当時珍しい鉄筋コンクリート建てで南米マヤ・インカの装飾を施した独特な近代建築として国登録有形文化財に指定されています。竣工から2年後に、花嫁学校として「芝蘭社

(しらんしゃ)家政学園」として門戸を開け昭和18年までに三千人の卒業生を送り出しました。現在は2階・



3階は事務所として、1階にはバーやチョコレート専門店に福井県のメガネメーカーの直営ショップ、地下1階にはベトナム料理と珈琲専門店として活用されています。1月6日(水)～16日(土)の11時～19時まで4階のモダンテラスで、大阪府所蔵の美術コレクションから、女性作家の木村嘉子“丸の作品”、田中栄子“森へつづく”イチハラ・ヒロコ“江戸時代から好きでした”の展示会が無料で開催されていました。

サロン会場のフランス風ベトナム料理店「リヴィゴージュ」で、ハス茶やベトナム風コーヒーやチャー・ダウ・サイン(白玉入りココナッツゼンザイ)を味わいながら、大阪大学の芝名誉教授のお話をうかがいました。

緒方洪庵と適塾について・芝哲夫大阪大学名誉教授

緒方洪庵は16歳の時に、足守藩の蔵屋敷留守居役に任命されたため父に随行して大阪にやってきます。武士の家に生まれたとはいえ、三男でしたので、家督は継げない上に、体が弱く、医師で身を立てよう、新しい医学をまなぼうと志を立てます。当時は、適塾の裏に今は愛珠幼稚園のある所に、「オランダ屋敷」と呼ばれたシーボルトも江戸に行く途中宿泊した「銅座」という建物がありました。鎖国していましたが、キリスト教の布教をしないということで、オランダとは交易がありました。東洋医学ではなく、足守の蔵屋敷の近くに大阪でも数少ない蘭学者の一人中天遊が思々斎を開いていたので入門します。4年学びましたが、洪庵が優秀だったので、中天遊は江戸の坪井信道のところで学ぶことを勧め、「昨日のことで心惑わされず、今を大事して生きなさい。」という詩を若い洪庵に贈っています。洪庵は按摩などしてお金を稼ぎ苦学して江戸に出て坪井信道の元で学び、推挙されてその師匠の宇田川樸斎にも師事し、江戸での修業を終えて、大阪の中天遊没後の思々斎塾で教え、同じ塾で学んでいた名塩の億川百記が資金をだして、中天遊の遺子中耕介を伴って長崎へ留学の旅にでます。大阪に戻った後に、北御堂の傍の瓦町に適々斎塾を開き、億川百記の娘17歳の八重を妻として迎え29歳で蘭学塾を開きます。すでに緒方洪庵は有名でしたので、沢山の塾生が集まり手狭になったので、今日見学します適塾を天王寺屋という町人から今でいう住宅ローンを組んで購入します。



緒方洪庵は、3つの仕事をしました。1つは西洋医学の知識を翻訳によって日本に紹介したことです。大作なのは、名医のドイツのベルリン大学教授フーフェランドが自分の経験を集大成した内科書をハーマンがオランダ語に訳した本を手に入れ「扶氏医戒之略」として二十数年かかって翻訳し30巻を出版したことです。第一編 急性熱病 第二編 慢性熱病 など様々な病気に関して研究結果をまとめた当時貴重な本となりました。ただ、出版までに年月がかかったのは、漢方医からの圧力や、西洋医学に対してまだまだ政治的にも不安的な世相があったためでした。緒方洪庵が翻訳したなかで、それまでにない言葉、例えば「ヘルス」ということばを、それまでに文献にでてきていない「健康」という言葉に置き換えています。また緒方洪庵は「病学通論」を訳しました。これは今でいう「病理学総論」と称されている学問についても訳しています。更に、安政の大獄があった夏に、長崎に入港したアメリカの軍艦ミシシッピ号の乗組員が感染源になって、



九州・四国・近畿から江戸に及ぶコレラの大流行し、大阪では7月～8月にかけて大流行し、洪庵はいそいで「虎狼痢治準」を百部刊行し、医師に無料で配りました。細菌感染であることは当時まだわかっていませんでしたが、生魚や生野菜を食べてはいけないと忠告し、生食して感染を増やさない一助となりました。洪庵は多くの人々が亡くなっていくなかで、何か手を打たねばという医師の責任感が強い人だったので出版をしたのでしょう。

1つは、天然痘の治療の為に、除痘館を作ったことです。洪庵の人徳で、天然痘の治療においては無料で従事しようと各地の医師165名の仲間に声をかけ誓約書を書いて取り組んでいます。まさに「世の為人の為に」という行動であり、社会医療の先駆的な活動です。天然痘の膿を、5日間の間に次の子供に植えないと菌が絶えてしまうのですが、牛の菌を植えると牛になるという風評が広がったため、お金を払って貧しい子供たちに種痘をしてその菌を植え付けつづけたりました。そして、天然痘が流行しても天然痘予防を受けた子供たちは感染を免れたのをみて、次第に除痘館での医療が評価されていきました。

緒方洪庵の功績の3つ目は、適塾から優秀な人材を育てということです。24年大阪に在る間に、北海道から鹿児島まで各地から若者がやって来ました。姓名録には、安政2年3月9日入門と福澤諭吉が書いています。福澤は中村という伯父さんの家に養子に行っていたので、入学当初は中村諭吉と書いていたのですが、福澤姓に戻ったので、後に下げ札を張って福澤諭吉・中津藩と書き換えています。姓名録に書いていない塾生も多く、1カ月ほどで出ていく者もあれば十年以上いるものもいます。

クラスは九等にクラスわけされ、年齢や身分は貧富の差に関わらず、1月に6回の会読会で、原書を写した内容を適塾に一冊しかない蘭和辞書を引いて翻訳するのですが、誰にも聞いてはいけない。相談してはいけない。自分の力で訳さなくてはならなかったもので、福澤諭吉が強調している、独立自尊の精神は適塾での会読会によって培われていったと思うのです。

福澤は日記に、「今時は江戸から大坂に学びにくるやつはいても、大阪から江戸に学びに行くやつはいない」と言うほどの気概があり、適塾の教育システムを真似て福澤が慶応義塾大学を作った去年がちょうど150年でした。福澤諭吉は、前の大阪大学の付属大学があったところに中津藩の蔵屋敷がありました。福澤諭吉のお父さんは中津藩の下級武士として大坂に来て、商人からお金を借りてやり繰りするという仕事をしていました。お父さんが福澤諭吉が小さい時に亡くなり、家族は中津にもどりますが、大坂とは異なる昔ながらの中津での暮らしは門閥主義で本当に窮屈だったので、長崎に勉強にいきますが、やはり江戸に行って勉強しようと思って船に乗り、途中大阪で降りて父の跡を継いだ兄がいる蔵屋敷に立ち寄ります。兄から江戸に行かなくても大阪に緒方洪庵という立派な先生がいると勧められ、諭吉は適塾に入門することになります。福澤諭吉は適塾で猛勉強します。親友が腸チフスになり看病しているうちに、福澤自身も感染し重傷になってしまいます。兄のいる中津藩の蔵屋敷で臥せっている福澤を忙しい洪庵が毎日蔵屋敷まで見舞いました。緒方洪庵は、「お前のことは他人とは思えない。自分の息子の様に思っているの、毎日顔を見に見舞いには来るが、自分の身内への診断は鈍ってしまう。投薬は別の医者に頼んでいるから」といいます。福澤諭吉だけではなく、塾生たちにも愛情をもって関わった緒方洪庵の人柄や師弟の間の情の深さを物語っています。

誰にでも誠実に接し温厚な緒方洪庵の人柄は更に人気を集め、幕府に奥医師として使えるように請われるたびに、断りつづけるのですが、遂に断りきれずに討ち死にする覚悟で江戸にむかいます。実際江戸城での暮らしは格式を重んじるので、沢山のお金がかかり、「大貧乏になった」と手紙に書いています。一年単身赴任で、二年目には子供を引き連れて八重が江戸に来たので落ち着いた暮らしが続くかと思われた矢先、心労が積み重なったのか八重の前で突然大量の血を吐いて亡くなってしまいました。緒方洪庵生誕200年にあたり、大阪大学や、適塾記念会に除痘館主催の、記念イベントやNHKも顕彰番組を企画中であるなど目白押しですので、またご参加ください。

除痘館資料室

〒541-0042 大阪市

中央区今橋 3-2-17

緒方ビル 4F

06-6231-3257・

日、祝休館・

入館無料

平日 10:00～6:00・

土曜 10:00～13:00・



一階には、手塚治のスタッフが描いた除痘館のイラストが掲示されています。4階の除痘館記念室では天然痘の資料が展示されています。緒方洪庵は、適塾で塾生に蘭学を教える傍ら、適塾の裏手にあるこの場所に除痘館を設立しました。



た。除痘館では死亡率が二割を超える恐ろしい伝染病であった天然痘から子どもたちを守るため、イギリスのジェンナーによって開発された牛の痘苗による

予防接種活動を行いました。これは日本における予防医学の原点ともいえるもので、洪庵亡き後も受け継がれ、明治維新以後、公共事業として引き継がれるまで続きました。

適塾（国登録有形文化財）：

大阪市中央区北浜 3-3-8 06-6231-1970・

開館時間：10:00～16:00 休館日：月曜、祝日の翌日・

祝日の場合は翌日休

入館料：大人 250 円、高・大学生 130 円



緒方洪庵先生の像の前で写真を撮った後適塾内を見学しました。

参加者：

一般：

大塚良子・

杉本千恵子・

辻本智子・

福本文緒

塾生：浅井憲治・秋山建人・池田萬助・井上章・大川哲次・大利忠・大森史子・下野譲・高木勇一郎・中島一・中村孝夫・浜田真弓・原田彰子・船戸一郎・堀内紀江・丸山公子・森欣子・水本光洋・山口信男・弓削季也